

【1】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人間のからだでいちばん大切なところはどこか、ときくと、だれしも「頭」と答える。a おなじ質問を江戸時代の人にしたとすると、おそらく「腹」とか「胸」と答えるにちがいない。「頭」が人間の中心で、人間の頭脳が世界を支配しているという考え(イデオロギー)は、近代西欧の産物である。その西欧的人間中心のイデオロギーが地球(＝自然)に対して何を犯してきたかを、今、私たちはようやく知った。

「頭」という身体語を使った慣用語には、「頭が痛い」のほか、「頭を使う」「頭が下がる」「頭が上がる」「頭が切れる」「頭を冷やす」「頭が固い」「頭打ち」「頭数」「頭金」「頭越し」などいくつもあがるが、日常、頭にとつていちばん困るのは、「頭にくる」ことである。「頭にくる」とはうまい表現で、じつさい血が頭にのぼってカーッとなる。原因は多くが人間関係であるから、その関係を直せばなおるわけであるが、それができないからますます「頭にくる」。そんなときは、文字どおり「頭を冷やす」とよい。頭を冷やし、足を温める。b 「頭寒足熱」である。病気で発熱したときも、よく頭を冷やす。頭は熱に弱い。「頭にくる」人は、性格というより、その人からだの方向ともいうべき「体癖」による。頭をなおそうとするよりも、c からだの向きを直していくことが先であろう。

十九世紀のヨーロッパで頭の外形で人の気質や運命をAシンダシする「骨相学」というのが流行したことがある。いかにも頭脳中心の西欧人らしい考えである。

今日では管理社会で病んだ頭脳を癒すのに医学ばかりか音楽や絵画まで使われるご時世となったが、まず頭がからだを支配しているという考えを捨てるべきであろう。

かつての日本人は頭脳より身体に価値を置く生き方あるいは生活感覚をもっていた。そのころは「頭にくる」ことはなかった。そんな慣用語もなかった。それが、都市化と工業化にともない、() X () (＝都市)が() Y () (＝自然)より優位に立ち、さらに情報化社会は情報(＝脳)が世界を統御する方向をおし進めていき、今、世の中全体が「頭にくる」にきている。それを直さなければ、人ひとりの「頭にくる」病いもおせないのかもしれない。

日本人は、比喩的にいうと、明治以前は胸や腹で考えていたといつてよい。日本人が頭で考えるようになったのは、明治以降である。日本における西欧型近代人の誕生である。

c 夏目漱石の『それから』は、「代助の頭の中には、大きな蛆。下駄が空からぶら下がつてゐた」ではじまる。d この作品は、結びの一行、「代助は自分の頭が焼け尽きる送電車に乗つて行かうと決心した」まで、全編「頭」ということばでウめつくされている。漱石は神経症に苦しんだが、代助の頭の状態は漱石自身のものであった。

私たち日本人は、心で思っていることを「胸の内」あるいは「胸中」という言い方をする。「頭の内」とか「脳中」とは言わない。「胸に聞く」「胸が痛む」あるいは「腹をきめる」「腹が立つ」というのも、すべて心のことである。

もとより、今日では小学生でも心の在りか、生命をつかさどるc チュウスイウの場所といえは、「脳」と答える。しかし、こうした身体語の入った慣用語が今日も日常的に生きていることは、日本人のメンタリティ(心性)の基層に、脳より胸や腹を大事にする考えが依然として存在している証拠である。じつは、このへんに日本における脳死論議のむずかしさが隠されているのかもしれない。

(立川昭二『からだの文化誌』による)

問一、二重傍線部A～Cのカタカナを漢字に直しなさい。

問二、空欄a) d)に当てはまる適切な語を、それぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、たとえば イ、そして ウ、いわゆる
エ、あるいは オ、しかし

問三、空欄(X)・(Y)に当てはまる適切な語を、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、感情 イ、精神 ウ、頭脳 エ、身体
オ、人工 カ、文化

問四、傍線部①「からだの向きを直していく」とあるが、具体的に何を直せばよいのか。文中の語で答えなさい。

問五、傍線部②「世の中全体が『頭にくる』』とはどういうことか。次の中から最も適するものを選び、記号で答えなさい。

ア、情報化が社会の仕組みを変え、都市と田舎のバランスが崩れていること。
イ、情報化社会の中で頭脳中心主義の考え方が進み、人々が病んでいること。

ウ、日本人の生き方が情報化社会を受け入れることを拒み、人々が苦悩すること。

エ、頭脳中心主義の考え方が情報化社会を進展させ、人々が墮落していること。

オ、頭脳中心主義の考え方が見直されつつあり、人々の対応が迫られていること。

問六、傍線部③「比喩的にいうと、明治以前は胸や腹で考えていた」とあるが、その「胸や腹」とは何の比喩か。文中の語で答えなさい。

問七、傍線部④「西欧型近代人」とはどのような人間をいうのか。

次の文の□にあてはまる適切な語句(二十字)を、文中から抜き出して答えなさい。

□を持った人間

問八、次の文のI・IIにあてはまる作品名を、それぞれ答えなさい。

漱石は『それから』の書かれた前年、田舎の高校を出て東京の大学に入った学生を主人公とする『I』を発表した。また『それから』の完成後、このテーマを発展させた『II』を発表した。

【2】 次の漢字の傍線部の読みを平仮名で答えなさい。

- ① 希有な出来事。 ② 絢爛たる文化。
③ 両家の間の葛藤。 ④ 事実を歪曲する。
⑤ 辛辣な批評。

【3】 次の傍線部のカタカナの部分に漢字に直しなさい。

- ① 転職のケイキにする。 ② シサに富む意見。
 ③ 利益をキョウジュする。 ④ 社会生活のキハンとなる。
 ⑤ 欠点をシテキする。

【4】 次の（ ）に漢字一字を補い、四字熟語を完成させなさい。

- ① 猪突猛（ ） ② 一言（ ）士 ③ （ ）善懲悪
 ④ 博覧（ ）記 ⑤ 順（ ）満帆

【5】 次の各文の傍線部の文節に対し、（ ）の中に示した関係にある文節はどれか。その文節を抜き出して答えなさい。

- ① そこは平和で静かな町だった。(主語・述語の関係)
 ② 広場に集まった群衆は喜びの声をあげた。(修飾・被修飾の関係)
 ③ あの人は確かに山口君のお父さんだ。(修飾・被修飾の関係)
 ④ ぼくは、いつもより早く出発したのに、遅れた。(接続の関係)
 ⑤ いろいろ考え、工夫して、本棚をつくれ。(並列の関係)

【6】 次の熟語①～⑤と同じ構成になっているものを、解答群ア～カからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ① 技術 ② 真偽 ③ 競技 ④ 雷鳴 ⑤ 入試

〈解答群〉

- ア、高校 イ、優秀 ウ、非常 エ、防音
 オ、腹痛 カ、巧拙

【7】 次の傍線部の故事成語の使い方が正しければ○、間違っていれば×を書きなさい。

- ① 彼は常に大胆な行動でみんなを驚かせる。逆鱗に触れるとはこのことだ。
 ② 隔靴搔痒というように、一步一步着実に物事をこなしていくことが大切だ。
 ③ 志望校に合格するまで、テレビを見ないことにした。臥薪嘗胆というからね。
 ④ 彼の失敗を他山の石として、同じ間違いを繰り返さないようにしよう。
 ⑤ 点数が悪かった答案用紙を隠していたら、母に見つかってひどくしかられた。まさに圧巻だった。

【8】 次の傍線部の語句の意味として最も適するものを、それぞれの解答群ア～オから選び、記号で答えなさい。

- ① この山は、歴史のはじめから、見る者の心に畏敬の念をおこませてきた。
 ア、おそれ、うやまうこと イ、おそれ、おのくこと
 ウ、あやぶみ、おそれること エ、うやまい、いとおしむこと
 オ、うたがい、あやしむこと
 ② たぶん日本政府との間によけいな軋轢が生じるのをふせぎたいのだらう。
 ア、衝撃が生まれること イ、不必要な見方があること
 ウ、関係がきしむこと エ、圧力に屈すること
 オ、争いにくむこと

③ これはまた過分な評価を頂いてしまったものだ。

- ア、信じがたい イ、丁寧すぎる
 ウ、きまりの悪い エ、時機を逸した
 オ、身に余る

④ 彼女の今までの行動は何物にも拘泥しない天真の発現に過ぎ

- なかつた。
 ア、抵抗すること イ、こだわること
 ウ、悩むこと エ、かかわること
 オ、一喜一憂すること

⑤ 部分的な事実が入っているだけに、よけいに話が錯綜し、周囲も混乱する。

- ア、激しく音を立てて イ、延々と続いて
 ウ、整然と並んで エ、複雑に入り交じって
 オ、曲がりくねって